浦島伝説

ウサンシー（穏作根子）は気品の高い若者でした。ある日、与那久浜でかもじ（女性の髪に添えつける髪）を拾い持ち主を探していました。現れた持ち主はとても美しいお姫様でした。姫はとても喜んでウサンシーを善人だとほめ竜宮へ招きます。竜宮では時の立つのも忘れるほど厚いもてなしを受けました。３ヵ月が過ぎた頃ウサンシーは帰ろうと思い立ちました。竜宮の神は「すでに三十三代という時間が経っている、ここで楽しんだらよかろう」と止めましたが彼は故郷が忘れがたく帰る事になりました。姫は名残を惜しんで「この紙包みを私と思い持ち帰ってどんな事があっても開けないでください」と手渡しました。

故郷に帰ったウサンシーを知る者はやはりいません。一人寂しく村の前の丘に登って行きました。そして姫からもらった紙包みを開けると中には白髪が入っていました。それがウサンシーの体につくとウサンシーは急に老化し死んでしまいました。ウサンシーはその場所に葬られ、その場所はウサン嶽と名づけられました。　（字誌等を参照）

与那覇プロフィール

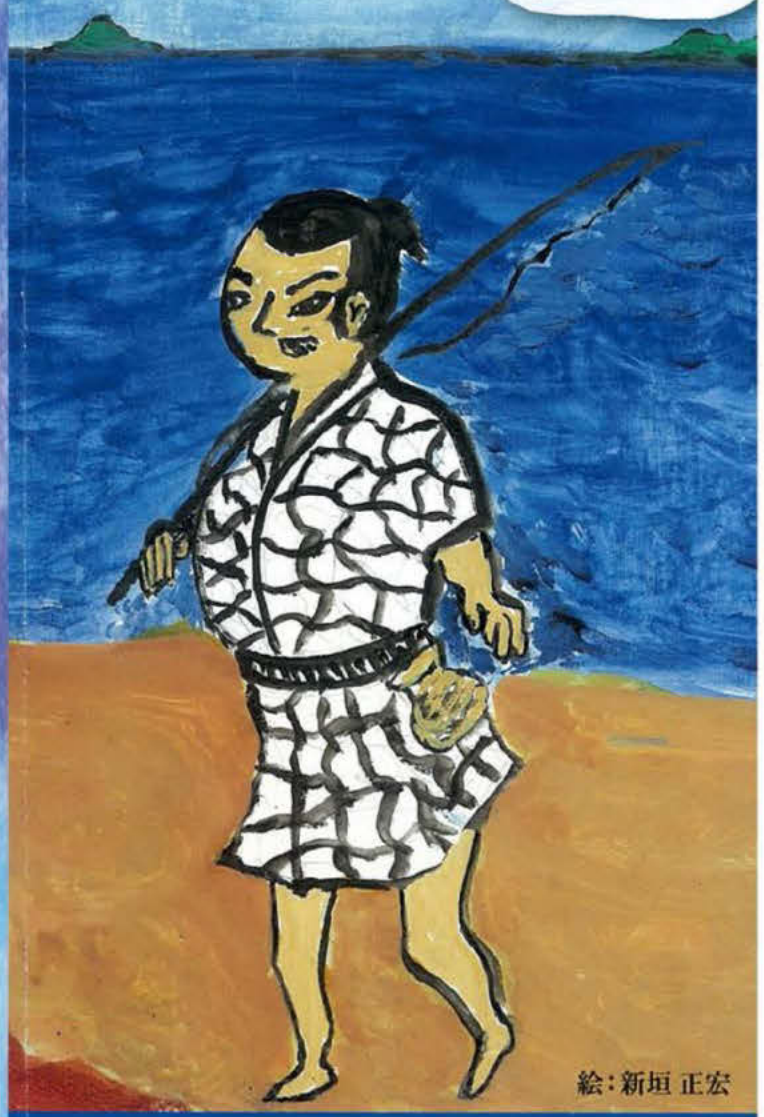
人口（男）…1,184人　世帯数…821世帯
（女）…1,219人　面　積…44.2ヘクタール
合計…2,403人　2011（平成23）年7月末現在

発行：非営利活動法人 南風原平和ガイドの会
住所：沖縄県島尻郡南風原町字喜屋武257
南風原町立南風原文化センター内
電話・FAX：098-889-2533

平成23年 沖縄県雇用再生特別事業『シマじまガイド事業』

浦島伝説とやまびこのムラ

与那覇



絵：新垣 正宏

特定非営利活動法人 南風原平和ガイドの会

与那覇MAP

❶トーマヌウタキ（トーマの御嶽）

カンジャーヤー跡（鍛冶屋跡地）が当間原だったので、そう呼ばれています。

鍛冶屋の跡の火の神を中心に祀ってある御嶽だといわれています。戦前はシマヌ山とよばれる小高い丘の中にありました。

❷ウドゥングヮー（御殿小）

浦島伝説のウサンシー（穏作根子）の屋敷跡だと言われています。戦前は瓦屋根の建物であったが戦争で破壊され戦後にトタン屋根、現在はコンクリート建ての建物です。村落祭祀の内、正月の初拝みから12月のトゥシヌユルー（年の夜）まで祭祀儀礼が最も多く行われる拝所です。

❸イントゥン・クシヌモー

小高い丘陵（51.7m）で東西に連りムラの中で重要な拝所です。北側にはウトゥーシ（遥拝所）があります。クシヌモーからムラウチに向かって「おーい」と呼べばヤマビコが帰ってきたそうです。

❹グスクヌチジ、クボー御嶽

グスクヌチジには昔グスクがあったと言われています。グスクヌチジ内にあるクボー御嶽にはグスク系土器や少量の青磁器、陶器・陶質土器・牛の骨が発掘されました。

❺ヌンドゥルチ（与那覇ノロ殿内）

ヌンドゥルチは村落祭祀を行う聖地です。ヌンドゥルチに祀られているウコールは仲屋（宮城）と照屋が祀っていましたが、現在は、ノロもいないので区長が代表で村落祭祀を行っています。

❻ウーヌミーグヮー

糸芭蕉が生えていました。池の中は中州（陸地）があり、真中が盛り上がっていて獅子の頭に似ていたことから中州にはシシガシラと名がついていました。

百度の御願に拝みます。

❼メーヌカー

メーヌカーはウブガー（産井戸）とも言われ、字民に子供が出来ると、ウブガーの水で赤ちゃんを清め、加護を願いました。

その他、ウマチーの日には、神人がメーヌカーで身を清めイントゥンに登るなど、神聖な水として重宝されました。

❽ウサン嶽

写真：字誌より

与那覇に語り継がれている浦島伝説の主人公、ウサンシーが眠っています。昔、ウサン嶽は海人が目印にする程小高く、富士山の様な美しい形をしていました。

しかし、沖縄戦、その後の開発などの影響を受け、現在の形に様変わりしました。

現在の写真

字内の主要な道路

与那覇には琉球王国時代から重要な幹線道路が2本走っていました。ひとつは、アガリウマーイミチ（東廻り道・お新下り道）、もう一つは、首里と大里を結ぶ道スイミチ（首里道）でハミシが敷かれた馬車道でした。

与那覇の沖縄戦

南風原で与那覇は他字に比べると大きな特徴があります。学童疎開をした子供たちが多かったこと、1944（昭和19）年の10・10空襲の時、与那覇だけが空襲にあったこと、戦死率が低いことです。

当時与那覇では、各家庭の防空壕の外に字の防空壕も各班ごとに作っていました。

10・10空襲の時、各班の防空壕に避難できたので死者はひとりもださずにすみました。しかし、ほとんどの家屋・家畜も焼けて仮小屋に住み苦しい生活をしなければなりませんでした。家財を失ったため沖縄戦の時には疎開をする人が多く、結果的に低い戦死率になったと思われます。

シーサー（上沢岳）

終戦後のカヤブチムラヤー

⑨サーターヤー

戦前4つのサーターヤーがあり、それぞれ門中ごとに馬を使ってサトウキビを圧搾していました。

1939（昭和14）年にディーゼルエンジンの機械が導入され、部落共有の一つの製糖工場になりました。

絵・親泊賢次

⑩ナビラモー

言伝えによると昔は丘の近くまで波が打ち寄せていたと言われています。

現に井戸やボーリング調査で貝がらや砂が出てくるそうです。

この丘からは与那原の街全体、遠くは知念半島・中城湾も見渡せます。

たんぽぽ地蔵

子どもたちに親しまれている交通安全の守り神です。